平成三十一年（二〇一九）三月二十八日発行
『大倉山論集』第六十五輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

近代の漢学と社会貢献事業
―渋沢栄一と三島中洲の交流から―

町　泉寿郎

近代の漢学と社会貢献事業
―渋沢栄一と三島中洲の交流から―

町　泉寿郎

目　次

はじめに―二松学舎大学の日本漢学研究に関する取り組み
一　三島中洲と渋沢栄一
（一）三島中洲の略歴と学問的変遷
（二）渋沢栄一の略歴と学問的背景
二　渋沢栄一と、三島中洲および二松学舎との関係
（一）三島中洲と渋沢栄一の接点
（二）渋沢栄一と二松学舎
三　三島中洲と渋沢栄一の交差のかたち
（一）三島中洲の「義利合一論」
（二）渋沢栄一の漢学振興の立ち位置―「道徳経済合一説」と「官尊民卑打破」、『論語講義』
四　渋沢栄一の公益事業への関与
おわりに

はじめに―二松学舎大学の日本漢学研究に関する取り組み

筆者が所属する二松学舎大学においては、近年、「日本の漢文」に関する新たな研究に取り組んでいる。先に、文部科学省の助成による二十一世紀ＣＯＥプログラムに採択されて「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」（二〇〇四～二〇〇八年度）を推進し、目下はその後継事業として私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択されて「近代日本の「知」の形成と漢学」（二〇一五～二〇一九年度）を推進している。我々は一貫して「日本学」のための漢文研究を掲げている。一般に近代以降「漢学」は「洋学」にその座を譲って衰退したと見られがちであるが、学術面では中国学・東洋学に脱皮し、教学面では「漢文」が「国語」と並んで言語と道徳に関する教学として再編されて、前近代よりも広く一般に浸透したと見るべきである。また、この近代日本において形成された学術・教学体制は、東アジア諸国にも影響を及ぼしたと言える。したがって、我々は従来の「国文学」の一部としての「日本漢文学」にとどまらず、その研究対象を拡大し研究方法を刷新して、学術、教育（教育制度・教科書）、医学史（漢方・鍼灸）、宗教史（海外布教・宗教政策）、軍制、法制、福祉事業などの諸分野において「漢学」（漢字・漢文による学知の汎称）がいかなる意義を持ったのかを明らかにする研究に従事している。

今回は、「日本資本主義の父」と称される渋沢栄一が、『論語』の説く儒教倫理を唱道し、公益事業・福祉事業にも大きな足跡を残したことに着目し、その渋沢の漢学を考える上で不可欠な漢学者三島中洲との交流について明らかにし、日本近代における漢学と社会貢献事業の関わりについての具体的な事例を提供してみたいと思う。(1)

一　三島中洲と渋沢栄一

（一）三島中洲の略歴と学問的変遷

三島中洲（一八三一～一九一九、名は毅、字は遠叔）は備中窪屋郡中島村（現岡山県倉敷市）の豪農層の出身。三島が仕官した備中松山藩では、幕末維新期には、三島やその師山田方谷をはじめとして、武士階級以外の豪農豪商クラスから登用された人材が藩政に重要な役割を果たした。彼らは、学問的優秀性によってその経歴をスタートしている。

藩主板倉勝静の支持を得た山田方谷のもと藩政改革に取り組んだ備中松山藩では、全藩士子弟が学ぶ藩校有終館の他に、下級武士子弟と町人等が学ぶ教諭所が藩校附属施設として設置され、遊学者は藩儒らの家塾で学ぶこともできた（長岡藩河井継之助ら）。身分を問わず学術優等者には他郷遊学のための給費制度（修行扶持）が設けられており、学問成業のあかつきには農商階級から藩士への取立ても可能であった[2]。幕末期すでに武士階級以外の農商層にも学問による立身出世の可能な環境が整いつつあった。

幕末維新期の三島は、藩校学頭の儒職の他に、諸藩の情報探索や隣藩との外交掛、勘定方などの実務を兼務して藩政を支えた。佐幕藩の中核を担った旧藩主の禁錮が解けた後、明治五年に新政府に出仕した三島は、初め司法省に出仕して法曹（判事・検事）となり、後に東京大学に漢学を講じ、晩年は東宮（大正天皇）侍講を勤めた。これら公職の傍ら、備中松山藩儒時代と明治十年判事失職以降、家塾を開いて生徒に漢学を講じた。

三島自身は自らの学問について次の三変があったと述べている[3]。

第一期・備中松山の山田方谷の家塾牛麓舎での修学内容―朱子学。方谷が講義時に陽明学や仏説に及ぶことはなかった。洋学の科学・軍事技術には早くから接した。

第二期・津藩や昌平坂学問所の遊学時の修学内容―朱子学を絶対視せず古学や清朝考証学も取り入れた折衷学となった。三島は備中松山藩校「有終館」の学頭となった当初、考証学を講じたいと考えたが、方谷の反対を受けて、藩校での講義には朱子学を採用した。その後、彼の職掌が拡大するなかで、財政や外交など「俗務に就て方谷先生に質問し、又指導を受け、先生の実地運用の妙の陽明学に本づくことを悟」った。

第三期・二松学舎開設後の学問―「書生に教授するにあたって再び道学に復し、陽明学を主張し、傍ら訓詁を折衷した」、教育のために道学に復帰し、特に陽明学を主張し、字義の解釈には訓詁の知識も併用した。三島の学問には変遷があり、かつそのどの時期を通しても単純に陽明学と言い切れるものではない。

（二）渋沢栄一の略歴と学問的背景

渋沢栄一（一八四〇～一九三一、号は青淵）は武蔵国榛沢郡血洗島（現埼玉県深谷市）の豪農層の出身。従兄尾高惇忠（号は藍香、後に富岡製糸場初代場長）から漢籍を学び、水戸学の尊王攘夷論に傾倒。江戸の海保漁村塾・千葉道場に学び、文久三年には高崎城夜襲・横浜焼打を計画するが中止し、京都に出奔。一橋家用人平岡円四郎の知遇を得て一橋家に仕官。備中の一橋領で募兵活動に成功、井原の儒者阪谷朗廬と知り合う。慶喜の将軍就任にともない幕臣となる。次いで徳川昭武のパリ万博使節団に随従し渡仏（一八六七～六八）。新政府に出仕し、主に大蔵省で戸籍法・度量衡規則・貨幣制度・太陽暦採用・国立銀行等の事業に関与した。明治六年退官後、第一国立銀行を設立し、同七年以来、東京会議所や養育院に関与して、金融のほか、株式取引、紡績、船舶、鉄道、水道、石油、炭鉱、ガス、

発電、製紙、麦酒、製糖等の事業を指導し近代日本経済の発展に大きな足跡を残した。日本製糖疑獄事件も誘因となり、七十歳を機に実業界の一線を退き、以後は儒教啓蒙、女子教育、宗教問対話、民間外交などを通じたフィランソロピー活動を展開した。娘婿に東京帝大法科教授穂積陳重と大蔵官僚阪谷芳郎がおり、嗣孫敬三は民俗学者としても知られる。

渋沢の学問的背景について、次のことが指摘できる。豪農層には渋沢のような漢学的素養を身に着けたものは少なくなかった。いわゆる「漢学書生」は武士階級にとどまらず、また都市部だけでなく、広く地方の農商層にも見られたものであり、またそうした地方農商層の修学にはそれを支えた在村儒者とその人脈や情報ネットワークがあった。幕末期における大社会変動に、このような「漢学」に基礎をおいた「民意の伸長」は大きな意味を持った。内憂外患の時世を憂慮し、個人の利益だけを考えるのでなく、「国事を論ずる」、そこに身分の差などもはや存在しない。むしろ然るべき地位にありながら無為に座食する者は、責任を果たさない劣った存在であり非難に値する。渋沢のような青年たちは、その表現として尊王攘夷運動に身を投じたのである。渋沢自身の言葉を引けば、幕末期の彼自身を回顧して次のように言っている。但し、大正年間の回顧を幕末当時の心境のままと受け取ることはできない。尊王攘夷が即倒幕に結びついたわけではない。

> 況や己れ自身が徳川を倒さなければいかぬ、階級制度を覆さなければいかぬ、今で言へば民権伸張とか、デモクラシーとか云ふ主義を以て世に出掛けた身が、不幸にして変化して徳川の家来になつて、遂に維新の政変に遭遇したので、政治界から見れば、私は真に失敗した人間であつて、自ら考へると殆ど面目を失墜したので御座います。併し国を憂ふるとか、社会を思ふとか云ふ念は、仮令失敗しても少しも変りはない[4]…

したがって、渋沢は海外事情に通じて尊王攘夷運動が無謀であったことを悟った後も、幕末志士への敬意と哀悼を

決して失うことはなかった。長谷川伸が大作『相楽総三とその同志』（一九四三年初版）の中で言及したように、尊攘運動時代の渋沢が交流した人物に下総小金（現千葉県松戸市）出身で、芳野金陵や剣豪千葉周作に学んだ竹内廉之助がある。廉之助は弟哲次郎と共に天狗党の挙兵に参加したが捕縛され、弟は戦死したが、廉之助は薩摩藩邸に匿われた。後に廉之助は相楽総三の赤報隊に参加したため、賊名を着て自刃して果てた。哲次郎は靖国神社の祭祀対象になったが、相楽総三や廉之助は祭祀に与らなかったため、廉之助子孫ら関係者がその復権を求めて活動した。その時に渋沢は彼らの復権を支援し、竹内廉之助の墓が郷里に建設された際にその題字「竹内隆卿墓表」（明治四十五年二月、墓碑文は芳野世経撰文）を揮毫している。

二　渋沢栄一と、三島中洲および二松学舎との関係

（一）三島中洲と渋沢栄一の接点

上記のような経歴を持つ両者は、豪農層出身の出自など共通項もあるが、早くから交流があったわけではない。両者の接点について確認しておこう。

①実業関係

旧高梁藩士（備中松山藩は新政府に接収された後、明治二年に高梁藩として再興）の秩禄公債や藩主板倉家の資産、銅山等の藩の資産を原資として第八十六国立銀行（中国銀行の前身）を設立するにあたり、三島は渋沢から情報収集している（明治十～十二年）[5]。しかしこの時点で、三島は渋沢にとって、数ある銀行業務上の相談者の一人に過ぎない。

②就職斡旋

米国私費留学から帰国した長男桂の就職先を三島が渋沢に依頼したが、奏功しなかった（明治二十四年）[6]。他にも三島はしばしば二松学舎塾生や知友の就職口を渋沢に依頼していたようである。

③詩文関係

・渋沢の初婚の妻千代（明治十五年没）の墓碑文を三島が撰文。

・渋沢、前年秋の米欧視察を『欧米紀行』として刊行するにあたり、三島に漢文の序文の代筆を依頼（明治三十六年）。

・渋沢、親戚であり初学の師であった尾高惇忠の碑文を三島に依頼（明治四十年）

・渋沢の古稀を祝い、三島、「題論語算盤図賀渋沢男古稀」を撰文（明治四十三年）

明治四十二年（一九〇九）一月、東京瓦斯重役福島甲子三が渋沢の古稀を祝って贈った書画帖『介眉帖』の中に、岡山出身の画家小山正太郎が渋沢の信念である「経済道徳合一」を論語・算盤・朱鞘刀剣・シルクハットに託して描いた絵画があった。高等商業学校において渋沢が孔子に関する講演を行って経済道徳合一を主張したところ、これを聴いた三島が賛意を表した。更に渋沢邸で「論語算盤図」を見て感興を覚えた三島は、年来の「義利合一」の考えをもとに次の一文を贈った[7]。

青淵渋沢男今茲齢届古稀、一画師作男左論語右算盤図賀之。余観之曰有此哉、請題一言以為寿。男少受論語於尾高翁、稍長与志士交、唱尊王攘夷。既而従水府公子遊西洋、脩[8]経済学、因悟攘夷之非。帰則王政維新、擢為大蔵大丞、掌財務。一旦慨我邦[9]商業不振、辞官而創銀行、拠論語把算盤。四方商社陸続競興、皆以男為摸範、姦商黠賈蹙然屏迹[10]、商業大振。遂応米国招、率紳商而往、巡察諸商社、大得款待而還、是皆算盤拠論語之効也。画師能[11]知男矣。

然此知一、未知其二。何者、孔子為委吏料量平、与粟周急不継富、為政足食、既庶富之、礼与其奢也寧倹、待賈沽玉、是論語中有算盤也。

易起数、六十四卦莫不曰利、是算盤之書。而其利皆出於義之和、与論語見利思義之説合、是算盤中有論語也。

算盤与論語、一而不二。男嘗語余曰、世人分論語算盤為二、是経済之所以不振。今画師二之、非深知男者也。

且夫人之殀寿有定数、是天之算盤也。然不慎疾衛生、則不能尽定数。故子所慎斉戦疾。男既奉論語、必能慎疾衛生、尽天数之寿、不止古稀。是為寿言。

（青淵渋沢男、今茲、齢古稀に届く。一画師、男の左に「論語」右に算盤の図を作って之を賀す。余之を観て曰く、此れ有るかな、請ふ一言を題して以て寿と為さん。

男少くして「論語」を尾高翁に受け、稍や長じて志士と交はり、尊王攘夷を唱ふ。既にして水府公子に従って西洋に遊び、経済学を脩め、因って攘夷の非なることを悟る。帰れば則ち王政維れ新たに、擢んでられて大蔵大丞と為り、財務を掌る。一旦我が邦の商業の振はざるを慨き、官を辞して銀行を創め、「論語」に拠って算盤を把る。四方の商社陸続として競ひ興り、皆男を以て摸範と為し、姦商黠賈蹙然として迹を屏ひ、商業大いに振ふ。遂に米国の招きに応じて、紳商を率ゐて往き、諸商社を巡察して、大いに款待を得て還る。是れ皆算盤の「論語」に拠るの効なり。画師能く男を知る。

然れども此れ一を知って、いまだ其の二を知らざるものなり。何となれば、孔子は委吏と為って料量平らかなり〈『孟子』万章下・『史記』孔子世家〉、粟を与ふるに急を周って富めるに継がず〈雍也篇〉、政を為すに食を足し〈顔淵篇〉、既に庶なれば之を富まし〈子路篇〉、礼は其の奢らんよりはや寧ろ倹し〈八佾篇〉、賈を待って玉を沽る〈子罕篇〉、是れ「論語」中に算盤有るなり。

「易」の起数は、六十四卦、利を曰はざるはなし、是れ算盤の書なり。而して其の利は皆「義の和」より出で、「論語」の「利を見て義を思ふ」〈憲問篇〉の説と合す、是れ算盤中に「論語」有るなり。

算盤と「論語」と一にして二ならず。男嘗て余に語って曰く、世人「論語」と算盤を分かちて二と為す、是れ経済の振はざる所以なり、と。今画師之を二にするは、深く男を知る者にあらざるなり。

且つ夫れ人の殀寿に定数有り、是れ天の算盤なり。然れども疾を慎しみ生を衛らざれば、則ち定数を尽すこと能はず。故に子の慎しむ所は斉と戦と疾なり。男既にして「論語」を奉じ、必ず能く疾を慎しみ生を衛って、天数の寿を尽さば、古稀に止まらざらん。是れ寿言と為す。）

以上の渋沢・三島の交流についてまとめておけば、古稀以前の渋沢にとって三島は漢文の添削・代作を頼む気の置けない漢学者の一人にすぎない。渋沢の古稀以後、「道徳経済合一」「義利合一」をめぐり、三島と渋沢の距離が急速に接近する。しかしながらその関係はあくまで、個人的な関係を出ず、二松学舎と渋沢はなおも無関係であった。

（二）渋沢栄一と二松学舎

開設当時、私立中学の位置づけを得ていた二松学舎は、明治二十年前後の近代的教育制度の整備にともない公的位置づけを失って各種学校となり、進学者が激減する。日清・日露大戦期には対外的関心が高まって新たに東洋学が興隆しやや持ち直すが、概括すれば明治後半期には入ると二松学舎の経営は苦しく、漸次資金難に陥った。明治四十三年（一九一〇）一月、三島とその三男復は所有する学舎敷地を財団法人二松義会に譲渡。同五月、土方久元、股野琢、細川潤次郎、馬越恭平、阪谷芳郎、牧野伸顕、小松原英太郎、福島安正、山県伊三郎、三島とともに渋沢が二松義会の顧問となる。これが渋沢が二松学舎に関係する最初である。その後も渋沢は経営責任者となることを再三固辞した

が、大正六年（一九一七）に三島の懇請を承諾し二松学舎の経営に乗り出す。三島（大正八年歿）とその三男復（大正十三年歿）の亡き後、漢学振興の輿論を追い風に、昭和三年（一九二八）に国漢教員養成のための専門学校を開設し、二松学舎の永続的発展の基礎を築いた。

ここで一つの挿話を紹介しよう。三宅雪嶺は、渋沢歿後十年にして編纂された『青淵渋沢栄一翁写真伝』に序を寄せて、次のように述べている。現在では晩年の好々爺のイメージが浸透している渋沢の、同時代人による人物評として興味深い。

明治十年信夫恕軒が東京大学予備門で文章軌範を講義し、中に然諾の語あるや、これは新門辰五郎か渋沢栄一かに観ることが出来ると言った。恕軒は渋沢翁よりも五歳の年長で海保漁村の塾で相知り、それから懇意になったらしい。当時翁は既に銀行家として立ち、世間では押しも押されもしなかったが、本来幾らか辰五郎と共通の点があったらう。それよりも長脇差の傾向があったとすべきか。長脇差が実業界寧ろ全社会に成功したと言へよう。

「然諾」とは、「君子重然諾」（君子は然諾を重んず）の言葉に見られるごとく、いったん引き受けたら必ず実行することを意味する。周知のとおり渋沢はその生涯に厖大な事業に関与したけれども、社会公共事業に関して言えば責任主体となるような関わり方をすることは比較的稀であり、郷里などの地縁のある施設や主従関係にあった徳川家所縁の寺社など、個人的に縁故のある施設への支援に限っていたようにみえる。個人的縁故以外で関わる場合は、国家的視野に立った公益性の高い施設が多いように思われる。儒教関連施設の場合も、孔子祭典会・斯文会・湯島聖堂は徳川家所縁の施設という点で、増上寺・日光東照宮・上野寛永寺等と共通する性格を持つ。一方、陽明学を標榜する二松学舎に対して舎長となって行った支援は、実業教育・女子教育を除けば、一各種学校へのものとしては格別に手厚いものであった。これを三島中洲との個人的な関係のみに還元することはできないのではないか。渋沢はなぜ二松

学舎の経営を引き受け、またどのような教育機関としようとしたのであろうか。

大正中期の社会状況について簡単に言及すれば、第一次世界大戦中の社会主義革命はわが国でも衝撃をもって受け止められ、戦後、国民道徳涵養が課題となるなか、漢学振興が大きな運動となっていった。大正十二年（一九二三）の帝国議会衆議院で「漢学振興ニ関スル建議案」が審議可決され、漢学振興を目的とする組織の予算化が実現すると、まず運営団体として財団法人大東文化協会が設置され、翌年一月に教育機関として大東文化学院が設立される。予算委員会での審議内容から、「漢学振興」を国民道徳に結び付け社会運動化したい政治家や内務官僚らの意図とはやや距離を置き、文部省はこの予算化の目的を「古典保存」のために古典研究者を養成することに設定していた。

大東文化学院が漢学と皇学の古典研究者の養成を目的とする学校として創設されたのに対して、渋沢の指導力のもとで漢学塾二松学舎出身の山田準や尾立維孝が実務を取り、二松学舎は国語漢文の中等教員の養成を目的とする専門学校として歩み出すのであり、同じく高等教育機関であっても目的には明確な相違があった。二松学舎専門学校の設立趣意書には次のように記されている。

近年一般の人心物質に偏重し階級闘争を是認する等悪化の兆候著しく、殊に青年子弟は国体の尊厳を弁へず忠孝仁義の大道を陋視し軽佻詭激の風漸く瀰漫せんとするに至る。本舎は茲に従来の目的を弘布且つ徹底せしむるには、専門学校を設置し国語科を併置して国体及国民道徳の真義を研修体得せしめ、国語漢文に通ずる多数の堅実なる中等教員を養成して、之を各地の中等教育に従事せしめ、以て人心の匡救正道の宣揚を勉めんとするものなり。[12]

二松学舎専門学校の理念には、「漢文振興」の時代を反映して、国家主義的な主張も明確に打ち出されているが、少数の選良や特殊な専門家の養成ではなく、全国各地の中学校の教育現場で教育に従事する中等教員を養成すること

を通して、社会の中間層を充実拡張、することを目的とした教育機関であった。その点において、二松学舎専門学校は、「官尊民卑打破」を掲げる渋沢の理念によく適った教育機関であったといえる。

三　三島中洲と渋沢栄一の交差のかたち

（一）三島中洲の「義利合一論」

次に三島と渋沢がどのような点において意気投合したのかをより詳しく知るために、三島の「義利合一論」と渋沢の「経済道徳合一説」について、それぞれの考えを見ておこう。

三島の「義利合一論」は、東京学士会院における明治十九年（一八八六）十月十日の講演に基づき、後に『中州講話』にも収録されて広く知られた。講演の冒頭において三島は次のように述べて、宋学以来、義理の説が盛行して義と利が峻別されるようになった。義と利は本来の儒教では不離の関係にあることを明らかにして、利が被った冤罪をすすぐと言い、自分の立場を明確に表明する。

支那趙宋ノ世、義理ノ説、盛ンニ行レテヨリ、利害ヲトクコトヲ屑トセス。是ヨリ義理ト利害ト、判然相分レ、漢学者ハ義理ノミ主張シ、利害得失ニハ関係セサル者ノ如ク、世人ニ見做サレタリ。然ルニ、古聖賢ノ言ニ徴スレハ、義理利害、相須テ離レス。故ニ義利合一論ヲ講シ、此冤罪ヲ雪カントス。[13]

続く第一段落において、三島は自らの「理気論」を展開している。三島は朱熹ら宋儒の「理気二元論」を誤りとして斥け、根源には「一元気」すなわち「大極」があるのみとする。古典の所説も同様であり、王陽明の所説「理者気中之条理」「理気合一」は正しいとする。三島は陽明学だけに依拠するのではなく、先秦・漢代の古典の思想との折

衷を試みている。

「人間ノ義利ハ、即チ天上ノ理気ナリ」と言い、「生ヲ欲シ利ヲ好ム自愛心」は人間の根源的な志向であり、否定すべきものではなくむしろ「自愛心ヲ人ニ推及シ利欲ヲ公共ニスレハ」、自然界において一気から「元亨利貞」の条理によって万物が生育する如く、人間界においては仁義によって利を求めれば平天下に至ると説く。

義と利の関係を説明した古典として『易経』を挙げ、文言伝の「利者義之和也」を引いて、「利ハ義ノ結果」であり、「利ヲ得サルノ義ハ真義ニ非ス、又義ニ由ラサルノ利ハ私利浮利ニテ真利ニ非」ずとする。古典からの引用を重ねて、「義者利之道表（シルシ）、利者義之帰宿」と言い、義は利の目標ではなく指標であり、義を指標として利を求めると説く。

第二段落においては、義と利の先後について説いており、「利ヲ先ニシ義ヲ後ニセサル可ラス」、「利ノ為メノ義ニテ、義ノ為ノ利ニ非ス」と言い、利が先であり義は後であると明言する。宋儒の「理気二元論」を否定し、気の一元論（先ず気があってそこに理が生ずる）を唱える三島にとって、「利先義後」は当然の帰結である。

若シ宋儒ノ如ク、理アリテ後ニ気アリトセハ、義ヲ学テ、後ニ始メテ衣食居ヲ求メサル可ラス。然ルトキハ、義ヲ学ヒ得サル内ニ、身ハ既ニ凍餓セン。是言フ可クシテ、行フ可カラサルノ説ナリ。然レトモ既ニ義ヲ知リタル上ハ、又利カ後ニナルモノナリ。

自愛心などの利欲がまずあって、次に「義ニ由テ利ヲ求メル」という順序で義が問題になるのである。

第三段落においては義と利の軽重について論じ、基本的には「利ノ為メノ義」であるが、人を教え導き世を治めるには「義ヲ重シ利ヲ軽ンセサル可ラス」とする。しかし「利ハ入ラヌト云フコトハ決シテナキコト」と説明している。次のような言葉も、三島が極めて現実に即した儒教経典解釈をしていたことが分かって、興味深い。

衣食居ノ利ヲ去テ、空ニ道義ヲ行ヘハ、独角力ヲ取ルカ如シ。故ニ此ノ利ヲ相手ニ道義ヲ行ハサル可カラス。不レ計レ利ト云ヘハ、鳥渡無欲ノ様ニ聞ユレトモ、実ハ求利ニ遠慮アル言ニテ、決シテ利ヲ求メスト云ニ非サルナリ。

仁義ヲ以テ民ヲ利スルノ君職ニ居ナカラ、己レノ私利ノミ図ルヲ、戒シムルノ言ニテ、（中略）決シテ利ヲ不レ可レ言ト云ニハ非ス。

教誨ノ言ハ、皆如レ此突込ミ過キタルモノニテ、真シ目ニ解シテハ主意ヲ失フコト多シ。

第四段落では例えば次のように宋学批判を展開しており、後世もっぱら朱熹の注によって経書を読み「義理ヲ主張シ利害ノ説ヲ卑シ」むようになったこと、さらにこうした義を重んじ利を軽んずる考えが行動にまで影響して無謀な施政を唱えた学者が出たことを宋末や幕末を例に挙げて問題視している。

程朱ハ、老仏ノ高遠微妙ナル説ヲ雇ヒ来リ、古経書合一ノ義利ヲ分離シ、義ハ天理故ニ存ス可シ、利ハ人欲故ニ去ル可シト、注釈サレテヨリ、後世専ラ朱注ニテ、経書ヲ読ミ、孔孟モ人欲ヲ絶滅シテ、利ハ大禁物ナル学問ト、誤解セシメタルハ、大冤罪ト云可シ。

なお、三島の「義利合一論」に対するこの時点での反応としては、楠本碩水や並木栗水ら道学を重んずる朱子学者からの批判[14]が目立ち、学者間の評判は必ずしも良くなかったことも附言しておこう。

（2）渋沢栄一の漢学振興の立ち位置―「道徳経済合一説」と「官尊民卑打破」、『論語講義』

渋沢は非科学性を包含しがちな仏教やキリスト教の信仰に対して、「怪力乱神」を語らない儒教に優位性を見ていた[15]。彼は儒教倫理に「安心立命」を見出しており、幼少期から身に着けた漢学的教養に変わらぬ信頼を置いていた。

しかしその一方で、前述のように豪農出身ながら国事に奔走し封建的身分制度の打破を掲げた初志を維持し続けており、封建的身分制度を支えた体制教学としての朱子学（および徂徠学）に対してははっきりとした批判があった。例えば、次のような言葉を残している。

我国の国民性をつくる上に於て、朱子学は偉大な貢献のあつたことは認めなければならぬが、それと同時に又富貴貨殖と仁義道徳とは相容れないものであるとの、誤つた思想を蔓延させた弊も掩ふ可らざる事実である。[16]

昔の漢学説は仁を為せば富まず富めば仁ならずと云つて、富貴功名と仁義忠孝とは全く種類違のやうに考へて居つた、是は決して孔子の教の間違ひではない、其後のヘボ漢学者の誤解である、蓋し朱子なども此ヘボ漢学者の一人かも知れない。[17]

渋沢にとって「義利合一」と「官尊民卑打破」は不可分の関係にあるテーマであり、また「官尊民卑打破」の思いは一生を貫く信念でもあった。渋沢が三島の「義利合一論」を知るのは、古稀以後のことであるが、渋沢晩年の「道徳経済合一説」の主張に、三島の所論はその理論的裏付けとなりえたと言える。

ただし、三島と渋沢の意気投合を彼らの個人的な交流だけに還元することは、不十分であると思う。渋沢栄一は内務省と太いパイプを持っていた。神社・土木・地方の各局長を経て原敬内相のもとで内務次官となり内務官僚の典型として知られる水野錬太郎（一八六八～一九四九）は、帝大法科大学英法科を首席で卒業後、渋沢の女婿である穂積陳重教授の薦めに従って第一国立銀行に入行し、商法会議所の法典調査委員会（会長渋沢）において実業家に商法・民法を逐条講義して修正意見の提出を担任した。帝大法科大学英法科の水野の一年下に当たる井上友一（一八七一～一九一九）は、内務省入省後、地方局一筋に歩み地方自治に尽くした人物であるが、渋沢は井上を「救済事業などの関係で屢々お会ひする」「極親しい友人」と述べている。一九一〇年前後の内務省主導の地方改良運動・国民道徳運

動・感化救済事業に渋沢は積極的に関与しており、渋沢が関係を持った公益事業を内務省の内政政策と関連付けて考えることは不可欠であると思う。

渋沢は、内務省主催による感化救済事業講習会において、平田東助内相・床次竹二郎地方局長らと共に出席し、全国から召集された実務者に対して中央慈善協会を代表して演説を行うなど（明治四十一年九月）、参加者をはじめ社会一般からも、渋沢の社会福祉活動は内務省の活動と近い性格のものとして見られていた。

国民道徳運動に関して見ても、第二次桂太郎内閣は明治四十一年（一九〇八）に戊申詔書を公布し、これを機に地方改良運動が本格化する。地方改良運動は日露戦後の疲弊した地方財政の立て直しとともに、「自由競争に伴ふ流弊を抑制」するために「教育勅語」の趣旨を徹底すべく国民道徳涵養を重視した。渋沢の説いた「道徳経済合一」は、戊申詔書が国民に求めている二途、すなわち経済発展と道徳涵養とよく照応する考えである。三島もまた恐らく詔書の趣旨が「義利合一論」と合致すると考えた。戊申詔書以後の国民道徳運動を背景に、両者の結びつきが強まったと見ることができる。

四　渋沢栄一の公益事業への関与

前述したように、筆者は渋沢の公益事業への関与は内務省の内政政策と不可分の関係にあったと考えている。ただし渋沢の関与が単に国家主導の事業に翼賛するだけのものであったかと言えば、決してそうではなかったとも思う。この点について、更に論じてみたい。例えば、渋沢が関与した医療福祉団体には次のようなものが挙げられる。

東京養育院：明治七年から関与し、長く院長を勤めた。

東京慈恵会医院：明治四十年財団法人化以来副会長を務めた。
恩賜財団済生会：明治四十一年皇室より施薬救療のため百五十五万円が下賜され、桂太郎首相・平田東助内相らと協議して財団設立に関与した。
日本結核予防協会：初め副会頭、大正十年財団法人化以来、会頭を務めた。
中央盲人福祉協会：昭和四年視覚障碍者団体の全国的連絡を図るため組織し、会長を務めた。
財団法人癩予防協会：H．リデル・光田健輔等の癩治療を支援し、昭和六年設立時に会頭となった。
滝乃川学園：石井亮一が着手した知的障碍児童の福祉施設。財団法人化にあたり理事長となった。

このうち最も古くから関与している東京養育院（現東京都健康長寿医療センター）は、松平定信の発案による七分積金の運用団体である江戸町会所に淵源があり、維新後、その資金は東京会議所に継承され、都市インフラ整備の一環として養育院が開設された。幕臣で東京市長を勤めた大久保一翁（忠寛）にその後事を託された渋沢は、廃止論の危機を乗り越えて（明治十五年）、養育院の東京市営（明治二十二年）に漕ぎ付けた。

東京養育院長としての渋沢は、定信忌日の毎月十三日に登院して長年に亙って管理責任者としての職責を全うし、この活動は渋沢を松平定信などの前近代の社会事業に眼を向けさせる契機となった。

渋沢は東京養育院の運営に関しても、単なる出資ではなく、影響下にある銀行と組んで基金の利息運用等による無理のない組織運営を行っており、ここに彼の近代経済人らしい特色が見出だせる。渋沢自身はフィランソロピーなどの用語は使用しないが、彼の公益事業を全体として見渡すとき、当時欧米でも広がりつつあった旧来型のチャリティーとは異なる新興経済人によるフィランソロピーとしての性格がそこに見いだせるように思う。

渋沢の東京養育院における活動を実際に支えた実務家に安達憲忠[18]（一八五七～一九三〇）という人物がある。安達

は岡山出身（備前国赤坂郡小野田村、現赤磐市熊山町）、天台宗僧侶。初め『山陽新報』に入社して自由民権運動に参画し、その時の同僚には小松原英太郎（後の文相）や山本梅崖（漢学者）があった。民権運動に対する政府からの干渉を経て、東京に出た安達は明治二十三年から大正八年まで（一八九〇～一九一九）渋沢に命じられて東京養育院の幹事を勤めている。

前述したように渋沢個人としては儒教倫理に信頼と親しみを感じていたが、彼が関与した福祉事業には、安達憲忠のような仏教者だけでなく、留岡幸助（一八六四～一九三四、備中高梁出身、監獄教戒師や東京家庭学校など感化事業に挺身）や原胤昭（一八五三～一九四二、旧幕臣、監獄改良事業）などのようなキリスト教徒も少なからず関わっていた。床次竹二郎内務次官は、明治四十五年（一九一二）に国民道徳形成のための協力体制を作るべく神道・仏教・キリスト教の代表者（各派管長等）を招集したいわゆる「三教会同」の演説において、「国民道徳の涵養は教育と宗教と相俟つて始めて全きを得べきもの」[19]と述べている。渋沢もまた公益を追及するためには、思想信条の内容を問わず、福祉事業の実務者として宗教家が有効であると考えたのである。

儒教の啓蒙普及に関しては、大正七年（一九一八）に斯文学会（明治十三年創設）や東亜学術協会・研経会等の中国学術関係の諸団体を統合して創設された斯文会がある。渋沢は、幕府教学の中心であった湯島聖堂が維新後顧みられず明治中期以降は東京高等師範学校附属の東京教育博物館となって「物置同然」に捨て置かれていることへの苦情を文部省に申し入れ、斯文学会（明治十三年創設）を社団法人化（明治三十六年）して運営基金を集めてその管理を任せようとした。ここにも、渋沢の幕府関連施設の維持存続への関心が読み取れる。旧世代の漢学者の集りであった斯文学会の組織改革は殆ど進まなかったため、大正初期に東京帝大教授服部宇之吉（一八六七～一九三九）に対して斯文学会からその資産を整理して文科大学に寄附講座のような形で「儒学科」を設置したいとの相談があった。とこ

ろが東京帝大文科大学での「儒学科」設置計画は、渋沢その他の反対によって実現できなかった。帝大側の窓口である服部宇之吉は渋沢にとって宗教間の相互理解を目的に掲げた民間学術団体「帰一協会」等において儒教倫理を唱道する同志ともいうべき存在であったにもかかわらず、意外にも渋沢は斯文学会の帝大移管には反対意見を主張した[20]。

既に中国関係の学術領域として漢学科（一八九三年～）から支那哲学科・支那史学科・支那文学科（一九〇五年～）に分化していた東京帝国大学文科大学において、更に「儒学科」を新設する帝大側の意図を考えてみると、やはり中国研究とは異なる国民道徳涵養に資する学術領域の設置を目指したものと考えてよいのではないか。渋沢の反対理由は明確になっていないが、放置されていた幕府遺構（聖堂）の保護に民間団体（斯文学会）を活用しようとしたものを、東京帝大の学科増設に使うのは筋が違うと感じたものではないだろうか。渋沢は、関東大震災によって罹災した湯島聖堂の再建にも尽力したが、その際に彼は「一般国民に寄附金を出させるやうに」したいと考え、小学生の生徒に一銭ずつ寄附させたとも伝えられる[21]。儒教の復興を上から与えられるものではなく、幕府遺構をシンボルとする民間学術団体を活用して、国民的自覚を促し民意による自発的な活動となる方向を望んだのである。

おわりに

以上、渋沢栄一と三島中洲の交流を通して、日本近代の漢学と社会貢献事業の関わりについて事例を紹介した。最後に簡単にまとめておこう。

渋沢栄一は、漢学によって培われる儒教倫理に生涯変わらぬ信頼を置いていたが、彼自身の尊攘運動の経験に照らして、封建的身分秩序を打破した幕末志士や明治維新に対する肯定があり、身分秩序維持に作用し幕藩教学体制を支

えた朱子学への批判があった。

渋沢の事例からは、北関東豪農層が尊攘運動に挺身した典型として、近世後期、身分制打破を目的とするだけでなく、支配階級だけでない広範囲の人々にまで「国事を憂える」、個人の利益を越えて公益を優先するといった価値観が共有されていたこと、その価値観は多分に「漢学」「儒教」の影響を受けたものであったことが読み取れる。また渋沢の場合には、彼自身が短期間新政府に身を置いた後、民間の新興経済人として生きたため、「官尊民卑」打破への思いは幕末から明治期へと維持された。

その渋沢にとって「義利合一」と「官尊民卑打破」は切り離すことができない関わり深いテーマであり、三島中洲の「義利合一論」はその理論的裏付けとなりえた。ただし、晩年の渋沢栄一と三島中洲の親交や渋沢の二松学舎への関与の背景には、日露戦後の戊申詔書に象徴される国民道徳運動があったことも見落とすことはできず、渋沢の儒教普及や宗教間協調に及ぶ広範囲な社会貢献事業は内務省の内政政策への協力として行われた面が否定できない。しかしながら、渋沢の活動が明治政府の国家政策の完全なコントロール下にあったとみることも難しく、東京養育院、斯文会など例が示すように渋沢の社会貢献事業には徳川家の事業の継承という側面があって、渋沢が「然諾」の態度を以て関与した社会貢献事業には彼なりの一貫した正義や論理があった。

複雑かつ変化の激しい現在の政治・社会・経済の状況下において、我々は価値とは何かという根本的な問いを迫られている。富の不均衡が社会不安を作り出している今、人と人とのつながり、その前提としての誠実・信用といった問題が問い直され、かつて古臭く見えた三島中洲の「義利合一論」や渋沢栄一の「道徳経済合一」が今一度賦活する可能性がないとは言えない。

注

（1）筆者がこれまでに発表した渋沢栄一に関する編著や論文は、町泉寿郎編著『（渋沢栄一とフィランソロピー1）渋沢栄一は漢学とどう関わったか―「論語と算盤」が出会う東アジアの近代―』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）所収の第七章「二松学舎と陽明学」、見城悌治編著『（渋沢栄一とフィランソロピー2）帰一協会の挑戦と渋沢栄一―グローバル時代の「普遍」をめざして―』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）所収の第四章「漢学から見た帰一協会―服部宇之吉の「儒教倫理」と日露戦後の国民道徳涵養―」である。本稿は、上記二本の論文をもとに再編したものである。

（2）『日本教育史資料』弐（文部省、一八九〇年）、六〇七～六一六頁。

（3）三島中洲『中洲講話』（文華堂書店、一九〇九年）所収「余の学歴」。

（4）『竜門雑誌』第三九〇号、一九二〇年十一月初出。『渋沢栄一伝記資料』第五十一巻（渋沢栄一伝記資料刊行会、一九六三年）所収。

（5）第八十六国立銀行設立時の三島中洲の関与については、『中国銀行五十年史』（中国銀行、一九八三年）を参照のこと。銀行設立時の三島の渋沢栄一への相談については、高梁市歴史美術館に寄託されている堀周平宛て三島中洲書簡（明治十年十二月二日付、明治十二年二月九日付）に見える。

（6）渋沢栄一宛三島中洲書簡（渋沢栄一記念館所蔵）による。

（7）「題論語算盤図賀渋沢男古稀」には、渋沢栄一に贈られた原本と、後に三島中洲が自身の著述『中洲文稿　第三集』巻之三（博文館、一九一一年刊）に収録したものがあり、文字に若干の異同がある。本稿では、渋沢栄一記念財団に所蔵される原本に従って掲出する。但し、句読に関しては『渋沢栄伝記資料』第四十一巻所収のものは若干疑義があるため、いま意によって改めたところがある。

（8）『中洲文稿　第三集』では、「脩」を「修」に作る。

（9）『中洲文稿　第三集』では、「邦」を「国」に作る。

(10)『中洲文稿 第三集』では、「姦商黠賈蹙然屏迹」の語句が削除されている。
(11)『中洲文稿 第三集』では、「能」を「似」に作る。
(12)『二松學舎大学九十年史』一九七六年、二九九頁。
(13)『東京学士会院雑誌』第八編第五冊所収、一八八六年十月三十日発行。
(14)この点に関して、岡野康幸「並木栗水『義利合一論辯解』解題並び翻刻」『日本漢文学研究』三号（二松学舎大学二十一世紀COEプログラム、二〇〇八年）などの研究がある。
(15)渋沢栄一『青淵百話』乾（同文館、一九一二年）所収、「二三　論語主義と経理思想」にもこうした考えが語られている。
(16)前掲注15『青淵百話』乾所収、「二二　論語と算盤」。
(17)『竜門雑誌』第二三九号、一九〇八年四月初出。『渋沢栄一伝記資料』巻二十六巻（渋沢栄一伝記資料刊行会、一九六〇年）所収。
(18)仏教系の社会事業家として知られる安達憲忠に関しては、光田健輔編『黎明期に於ける東京都社会事業と安達憲忠翁』（一九五六年）のほか、内藤二郎による先行研究がある。
(19)前田蓮山編『床次竹二郎伝』（床次竹二郎伝刊行会、一九三九年）、二五八頁。
(20)渋沢の湯島聖堂保存に対する関心と、東京帝大への斯文学会資産の寄附に対する反対に関しては、『斯文』の渋沢追悼号（第十三巻第十二号、一九三一年）所収の服部宇之吉「渋沢子爵と斯文会」による。
(21)『斯文』第五十九・六十巻合併号（一九七〇年）所収、宇野哲人の談話による。

【編者付記】　本稿は、平成三十年四月二十一日の大倉山講演会における「近代の漢字と社会貢献活動―渋沢栄一と三島中洲の交流から―」と題した講演の記録をもとに、加筆訂正を加えて成稿していただいたものである。